

島根県のよいところ

村上 英明

1、島根県のよいところは何か

郷里の島根県に帰って来て私は15年になりました。この間私は、島根県のよいところは何かと探し続けて来ました。

全国転勤族だった私は、それが気になって仕方がなかったのです。

2、島根県のお国自慢

島根県のお国自慢は何だろう。全国的に知名度の高い出雲大社、宍道湖、松江城などの名所か。あるいは、出雲そばやシジミ、ブランド牛や豚、銘酒などの名産物だろうか。出雲の神話や小泉八雲や森鷗外などの文化人だろうか。

こうして並べてみるとほとんどは松江・出雲のものしか出て来ず、私の郷里・石見の国のものはほとんどないのが寂しい。

しかも、そのどれもが古くからのものばかりで、今日の島根県人が作ったものではないのも気になるどころです。

現在の島根県人がつくり築きあげたもの、あるいは現に持っている独特なものはないのだろうか。

3、あった！

この15年間、探し続けて来ました。現在の島根県人が作ったよいもの、あるいは共通して持ち合わせているよいものはないのか。

あった！ 身近にあって気が付かなかったのですが、これだった！ それは全国にほとんど例のないもので、将に現在の島根県の宝物といっても、間違いないものと気が付きました。

それは私が参加させていただいている次の活動が元になっていました。

3-1、しまね映画塾

どんな活動なのか、内容まではよくご存じでない方も多いと思いますので、少しご説明しましょう。

出雲市平田の出身の錦織良成監督を塾長として、毎年塾生を募って、塾生自らに短編映画を作らせている島根県の事業としての映画塾です。出演あるいはスタッフ希望者を毎年募集して塾生とします。塾生数はここ2～3



写真一、作品上映会チラシ

年コロナ禍で減っていますが、それまでは毎年百数十人が応募し参加していました。

その活動内容は、ガイダンス、顔合わせ・オーディション、2泊3日の撮影合宿、編集講座、発表上映会と一年に6回、更に個々の映画作品ごとに打合せや準備にも集まって、毎年10本程度の映画を完成させて来たもので、参加料8千円のほか、旅費日当、宿泊費はすべて塾生の自己負担です。

作品上映発表会の様子が毎年、年末の深夜に山陰中央テレビで放映されていますから、ご覧になった方もおられるでしょう。

映画塾というものは全国にもたくさんあるようですが、塾生に実際に映画を作らせる塾は、全国にも例がないと塾長が常々言われています。

この塾の素晴らしいところは、応募者全員が映画制作に必ず参加できることで、それが口コミで全国の映画好きの間で広まり、遠く関東地方や九州からも応募者が集まります。

それに地元ボランティアと地元の方々が協力してくれること、例えば個人の民家や商店などをロケ地に使いたい場合やエキストラとして出演してもらう場合でも、使用料やギャラはなしですが、非常に協力が得られています。

しかし、20年続いたこの映画塾は、今年をFINAL・最終回とすると主催者側から発表されており、塾生から強い存続の運動が巻き起こっているところです。その様子は次のURLからご覧ください。

https://www.youtube.com/watch?v=Xz5_jRsiKiU

3-2、島根県技術士会の研究分科会

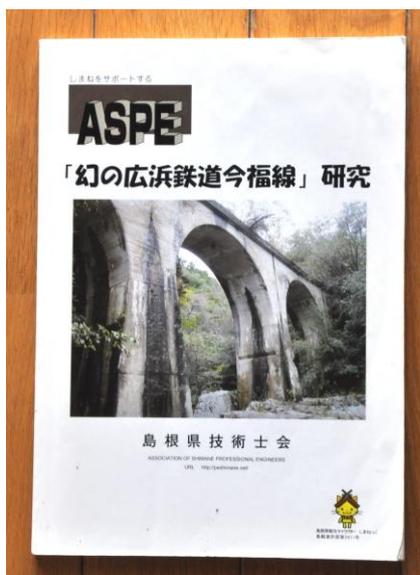
私は現役時代には全国転勤族だったのでいくつもの県の技術士会に所属しましたが、島根県のように各研究分科会が盛んで、しかも発展し続けている県は他に知りません。他県の技術士会にも研究会という活動

はありましたが、ほとんどは年に1回ぐらい見学会や講演会を開いている程度で島根県のように

自主的な活動が盛んで、論文集まで発行している県はありませんでした。

中でも我が今福線研究分科会は10年以上継続し、現在なお会員数は増え続け、地域との連携をますます深めて、鉄道遺構研究分科会と名称も内容も拡大して発展し続けているのは、みなさまご存知のとおりです。

私の知っている限りでは、他の県でもこうした活動を



写真一三、今福線の論文集



写真一四、ビブスと幟

始めようという声が挙がることもありましたが、その旅費、日当などの費用の出どころがないことが壁になり、その費用を自己負担にする発想までに至らず、活動そのものが始まるに至らなかったことが多かったのです。

また島根県では地元の方々や外部団体に協力を求める場合にも、使用料などは支払えないと説明すると、要求されることもなく協力が得られ、活動が続いて来ていることも嬉しいことです。

3-3、出雲そばりえの会など

以上2つの活動以外にも同じような発想で目覚ましい活動をしている会を捜してみると、やっぱりありました。出雲そばりえの会などです。

この会も素晴らしいボランティア活動を続けていて、県内のいろいろなイベントに出店して非常に好評を得ています。とりわけ出雲新そばまつりは島根県の恒例の年中行事になっており、多くのファンを集めています。

その活動は県内に収まらず遠く岡山県の津山さくらまつりなどからも要請を受けて参加されています。



写真一4、出雲そばりえの会の活動

この会の他にもボランティア活動は盛んで、登録数は120グループにも及ぶようです。石見神楽の神楽団も一種のボランティア活動といえるでしょうが、神楽団の数は140組もあるといえます。

3-4、これらの活動の類似点

これら活動は、お互いには何の連携もないのですが、次の点で非常によく似通っていることに気が付いたのです。

- イ、 どの活動も発足の当初から、参加者が活動する時の旅費・日当・宿泊費などは、ほとんど参加者の個人負担となっています。
- ロ、 どの活動でもわずかな補助金や売上利益は出ることはありますが、その額は必要経費に留まり、参加者の個人的な収入になることはありません。
- ハ、 地元の方々や他の団体からの強い協力が得られています。

二、 これらが好循環を呼んで活動はますます盛んになり、会員は増大し、広く県外からの参加者や要請も増えているのです。

上記の類似点は、どれも島根県内では当然のこととして通用し、これらの活動は10～20年以上の長期間に渡って続き、さらに発展し続けています。

4、島根県独特の土壌

全国的にもあまり例のないこれらの活動が多いのは、まず費用を会員が自己負担とすることで経費の問題を楽々と飛び越え、そのことが却って会員の意欲を高めてさえいるのでしょう。この会員の強い意欲が、地元の人々や他の団体の共感を呼び強い協力を掘り起こしていると考えられます。

しかし、それ以前に、これらの全国的に珍しい活動を可能にしているのは、島根県人という土壌に何か独特なものがあるはずです。その土壌がなければ、上記のような全国的に珍しい活動を始めてみても、10年も20年もの長期間に渡ってしっかり根付くことはできないだろうし、発展し続けるという花も咲かないと考えるのが適当でしょう。

この島根県人という土壌にある何か独特なものとは何か。それを言葉として捉えてみようとしたが、これが難しい。確かにあるはずの島根県人が持っているその独特なものとはどんなものか。

これを人情といったら意欲の元が表現できない。積極性あるいは先進性といったら一面的に過ぎる。

やはり意欲の元になっているエネルギーと感受性と共感性とでも表現すればよいのでしょうか。

それを現在の島根県人が確かに持っていることは、これらの活動の存在が証明しているといって間違いないでしょう。

これが現在の島根県人が確かに持っているよいところ、島根県人の宝物といったらよいところであると結論するものです。

以上。